変化する香南の海

大手の浜のサンゴは昭和6年と平成5年の調査により量や種類が記録されています。これを基に平成22年からこの区域の変化について調査している黒潮生物研究所の目崎拓真さんに香南の海の「今」をうかがいました。

消える海藻

大手の浜のサンゴは急激に増えた印象があります。調査の結果から見ても、サンゴが海底を覆っている割合（被度）が、平成5年の調査では約11％だったのに対し、平成23年には約42％にも上昇しています。

もう一つ激変していることがあります。海藻の消失です。

以前、大手の浜の東側、塩屋海岸を中心にカジメなどコンブの仲間が繁茂していました。平成5年の調査でも海藻の被度が100％の区域もありました。またそれを餌にするアワビも生息が確認され、商業として成り立つほどの捕獲量が記録に残っています。

しかし、海水温の上昇などが原因で、平成12年までに大半のカジメが消失しました。

昔の海中を知る人からすれば、今はまったく別の海に見えるのではないでしょうか。

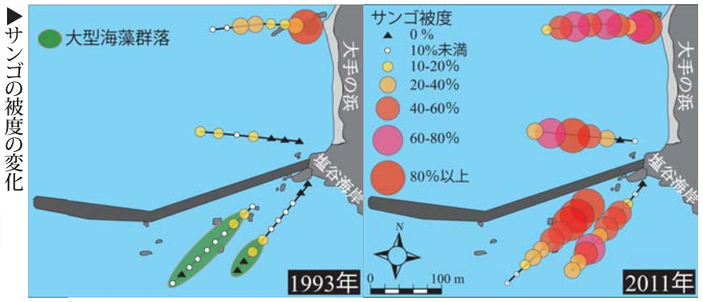
▲消失した海藻。昔はこの海藻が一面を覆っていた。

黒潮生物研究所
目崎（めざき） 拓真（たくま） さん

高知大学理学部自然環境科学科での卒業論文で大手の浜のサンゴ埋没について研究を行う。

修士課程から博士課程後期まで、東北大学大学院理学研究科地学科に在籍していたため、大手の浜の研究からは離れることになるが、高知県への就職を期に研究を再開し現在に至る。

▶サンゴの被度の変化



変わるサンゴ

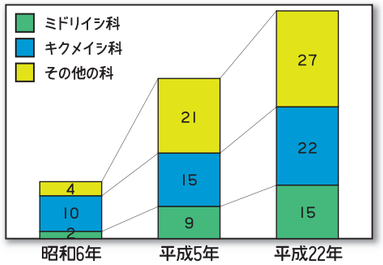
サンゴの種類も変わってきています。昭和5年の調査の時には、この地域に16種類のサンゴが生息していました。それが平成22年には64種類にまで増えています。

また、サンゴの優占※種も変化をしています。平成5年に覆っているサンゴの4.1％しか占めていなかった「クシハダミドリイシ」というサンゴが、平成22年には46％をも占める種になっていました。

このような特定のサンゴが増えることが、地球温暖化のせいなのか、それとも周期的なものかはよく分かりません。

ただ、環境の変化が進行しているのは事実です。今後も注意深く変化の方向を読み取る必要があります。

サンゴ種数の変化



未来に向けて

サンゴの変化の最大の原因として、海洋の温暖化が考えられています。気象庁の情報によると四国沖はこの100年間で海水温が約1.3℃上昇しています。1℃くらいと思われるかもしれませんが、海洋生物の分布には大きな影響が出るといわれています。

海は陸から眺めていると水面しか見えない平らな世界ですが、海中を覗いてみると、サンゴだけではなく、たくさんの生き物が暮らしています。

今年の夏は、香南の海がどうなっているのか、覗いてみてはいかがでしょう。

※優占種・・・群落内において、最も数が多いか、広い面積を占めている種

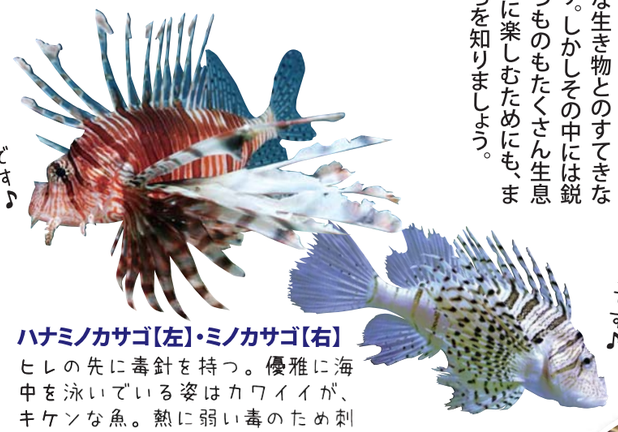
香南の海に行く前に

香南の 知っておこう！ 海に潜む危険な生物

海には不思議な生き物とのすてきな出会いがあります。しかしその中には鋭いトゲや毒を持つものもたくさん生息しています。安全に楽しむためにも、まず海の生き物たちを知りましょう。

ウツボ
見た目は怖いが臆病者。そのためビックリすると噛みついてくることも。見つけてもいたずらに手を出さないこと。

アンドンクラゲ
4本の触手を持ち、毒が強く、刺されると激痛が走り、みみず腫れになる。水面近くを泳いでいると見つけにくい。



ハナミノカサゴ【左】・ミノカサゴ【右】
ヒレの先に毒針を持つ。優雅に海中を泳いでいる姿はカワイイが、キケンな魚。熱に弱い毒のため刺されたらお湯につけると効果的。

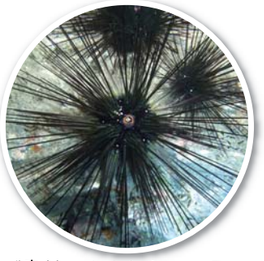
ゴンズイ
ヒレに毒針を持っている魚。小さい時は群がって浅瀬を泳いでいる。この魚の毒も熱に弱い。

オニヒトデ
直径６０ｃｍにもなる大型のヒトデ。１４～１８本の腕に毒のあるトゲがびっしり！サンゴの天敵です。

アカエイ
尻尾の真ん中に毒針を持っている。砂浜に埋もれて、もの怖じせずにジッとしているため、間違って踏んづけてしまい刺されることも。

アンボイナ【左】・タガヤサンミナシ【右】
キレイな貝殻。でも中身は・・・。全身麻痺を起こすほどの毒を持った貝です。中身がいる時は触らないこと。楽しい貝殻拾いも気を付けて。

イラモ
サンゴや岩にくっついている茶色の藻のような生物。ラッパ状の部分から毒を持った触手で刺してくる。



ガンガゼ
ウニの仲間で毒針におおわれている。もし刺されて一週間たっても治らない時は、トゲが体内に残っている可能性があるので病院で診てもらおう。